第十一章　風俗習慣

本村の風俗習慣は海岸地方たる下田原と山間部たる佐部、上田原とは多少其の趨向を異にせるも概して淳朴質素なりとす。今是が一、二を左に挙ぐべし。

一、風習（田原尋常高等小学校調）

本村は古来農樵漁業に従事するのみにして産物に認むべきものなく貧村なりしを以てか、雛祭、五月人形及び幟、七夕祭など行わず、けれども草餅、粽などを製して五節句を祝うことは行われたり。

古老の婦人には二巾若くは三巾の前垂を結ぶ。貴賤貧富を問わず階級的思想比較的少なし。例えば他家に入浴に至る場合も、前々より其の家に列しし者より順次に入浴するが如し。

古来伝わりし風俗習慣も改良せられて残存せるもの漸次に少なくなれり。

二、農事上に於ける祭儀習俗

虫除

挿秧後適当の日、各大字寺院に於いて虫除の御祈祷を行い、お札を竹片に挿み田地の水口に立つ。

虫送の行事は近来行わずなりぬ。

苗厄

苗代に播種してより四十九日目苗厄と称して其の日苗代に近寄らず。

三、迷信

一、丑の日葬式せず。若しこの日葬式せば必ず続いて死人を出すという。

一、旧暦本の中下段によりて吉凶を卜して事をなす。

一、狐憑、又は狐狸に化かさるとの迷信を有す。

一、病気の際、売卜者の言、或いは禁厭を信ず。

一、淫祠を信仰す。

一、牛鬼に影を喰わるる時は死ぬという迷信あり。

一、溺死者は川太郎に尻を取らる。

一、月の七日か二十八日か雨のショボショボ降る夜に樫野崎より下田原の葉山を経て那智山に渡り火す。天狗なりと。

一、五月節句に磯に行けば、モクリコクリ（元寇のことか）が来る。

一、鳥啼きが悪いから人が死ぬ。

一、旧暦七日、二十八日は山に行かず。

一、申の年には茄子が不作である。申生まれの人、申の日に茄子を移植し、又移植すると云ってもいけない。

四、俗謡

田草取

獨とるかよ五段田の草を
心長うとれなぎの草
日にち毎日山中通い
いつか下田にかかるやら

臼引

山家者じゃとおなぶりめすな
色のよい花、山に咲く
花立の水にだまされ咲いた
口惜し、根のない私に苦労さす。
破れ障子は二階から落ちて
障子ご苦労じゃ骨折りじゃ

子守

ねんねねんねと背中をたたく
何が寝ましょうたたかれて
奉公するとも子守はいやじゃ
人に楽じゃと思われて
守りは憎いとて破れ傘くれて
可愛我が子は地蔵ぬれ

五、田騒

田騒は熊野全般に行わるる特殊の競技にして年中労働に追わる

る農業者に在りては唯一の慰安娯楽なりとす。此の競技は熊野特有の風俗なるを以て其の起源沿革の一端を調査せんとしたるも何等文献の徴すべきものがなく、又は碑伝説の憑るべきものなし。

ある人の説に明治維新前西牟婁郡朝来辺より古座川奥三尾川辺に伝わりしもの漸次各地に伝播せるなりといえども、已に幕末に於いて太田組大庄屋の命令に依り郡内村々より競技に優れたる牛を出して下里村の新田にて田騒きをなさしめて甚だ盛況なりしとの目撃談もあれば、其の伝来の古きことも察せらるべく「日本及日本人」記者は太古の遺風たるやも知れずと言えり。尚後の研究を待つ。

当村にても大字上田原の競技に優れたる人ありて山中の田騒は近辺の観者堵を為したり。

左に「日本及日本人」に載せたる「田騒の記」を掲載して此の奇異なる競技の方法を紹介す。

紀州熊野といっても殊に盛んなのは其の中部那智、太田、古座川の沿岸地方であるが、毎年六七月に丁度田植の略済んだ頃、田騒というのを催すのである。これはいわば牛の競争で、附近の村々から優れた牛が参集出場し、水田の中で駈けるのである。熊野の田畑の耕作に、総て牛を使用するので、馬は殆ど一匹もないといっていい。もし馬が通ると珍しがって子供は其の後にぞろぞろついて見に行く程であるから、一般に百姓は牛を飼って居る。

村には又上手なかき手（まごという、牛を御しながら走る人で競馬で言えば騎手の如きもの）がある。一村が主催して、田騒をやるとなると各村から牛及びまごの優れた選手が参集するのである。牛は三日前頃調子調べをして出場すべきものを選定し、茶、酒、卵、人参、串柿、飯など食わして精力を養うのである。

競技の方法は廣い四角な水面で行うので、一頭には必ずそれに応じたまご一人がつく。牛は赤、白、青などの綺麗な布で角やからだを飾られているのは無論である。またまごは牛の後につけた「かいが」（騒具だろうと思う）を持ち、綱と鞭（ばいという）とで牛を御しながら、褌一つの眞裸で走るのである。競技によって一回に三頭或は四頭位ずつ出場する。五頭は殆ど無い。二頭以上出場の時も縦一行に進むので、横列の競争と違うのである。本鍬、四辺がき、四隅返し、鼓がき等の種類があるが、図式を見なければ難しくて迚も分からない。

簡単に説明すると、いずれも四段に分かれ、最初は水田の畔に沿うて、縦に四角な輪を描く、次ぎに横に四角な輪を描き、第三段には「たすき」といって角から角に対角線など描きながら走る。これにも本だすきと片だすきの別がある。第四段は稍円形的な輪を描く。こう言えば極く平易なようだが実際は見て居て素人に分からないのである。大抵一段に四回位田を廻るので、一つの競技に少なくとも十六回廻るのであるが、先頭のまごの随意で如何程でも廻り得るのであるから、勢力の続かぬものは迚も走り得ない。殊に「せり」といって最後の三四回に全速力で疾走するときは、余程巧妙と精力とを要するので、下手なことをすると、牛を田からそらして、畔の上にあげてしまう失敗をやるのである。又牛が餘り猛烈であると、それにつくことができず倒れて水田の中をかいがにつられた儘引きずられて全身泥をかむって泳ぐという悲惨な滑稽を演ずることもある。で、優秀な牛は弊を貰い、まごは贔屓贔屓から纏頭を貰うのである。

由来熊野は角力が盛んであるが、この田騒も見物の熱心なことは決して角力に劣らない。はるばる遠方から弁当を持って見物に出かけるのである。又その附近は氏神様の様に駄菓子、其の他の売店が田の畔や木陰に散在している。

巧妙な「まご」は逞しい（こって、と当地方では呼んでいる、牝牛は、うなめ、という）を首尾よくかき終った時などは、見物人は一斉に響もし、谷も山もゆるがん許りである。獣を使っての競技であるから勇壮素朴なこと此の上なしである。

以上で略田騒の概略を述べたのであるが、この田騒は和歌山県下も熊野独特の慣習らしい。其の他の府県でもあまりきかぬ。只飛騨にあるそうだと云うことを耳にした。俳句の歳時記にも載って居ないようである。是等を見ると或いは日本太古の遺風であるかも知れぬ。然るにこの面白い田騒の殆ど今まで紹介せられなかったのはどう云う訳か。

六、風俗に関する規定

文久三亥年三月十七日、太田組大庄屋より組内へ通達

一、格別の思召を以て江戸大阪へ積送り候荷物、百目に付四匁銀今日より御免相成候

一、日銭の儀以来御免被成候

一、帯刀人初庄屋肝煎組頭役掛の筋飯盛茶屋へ参候儀停止の事

一、仕出し料理屋へ召し盛下女呼出候儀不相成事

一、町村にて瞽女座頭其の外鳴物音曲譜相成事

一、　但祝之儀有之節は瞽女座頭呼候儀不苦
一、女髪結停止の事
一、在町共三味線、浄瑠璃詰り滞留致させ稽古不相成事
一、銘々勝手成事致し難渋願抔決して不相成事
一、以来羽織紐左之通
黒　御年寄
藤　御用人より御側御用人迄
花色　物頭より御給人迄
萌黄　御近習より御中小姓迄
鼠　御供小姓より御用部屋迄
右以下は真田紐相用可申事

第十二章　名所旧跡

本村の名所旧跡は旧誌に載録する所多からず。殊に佐部、上田原は順道に属せざるを以て旧記に記する所殆ど絶無なりとす。

「熊野歩行記」には
　この間海辺の風景絶佳也
下田原
佐部村
　太田組の内、在所は辰巳向古城の跡有り。山廻り十町三十間、高さ前通り二町二十間、二の丸東西五間、南北へ二間、本丸二の丸の内一丁十間、本丸東西へ六間半、南北へ二十間、四方高さ八尺の石垣あり。辰巳向東の方岩石、北の方山尾続き堀切巾三間、深さ一間半の堀也、東は谷川也

「熊野案内記」に曰く
　玉の浦より坂を上り(下り口に新宮領と境の印木あり)谷合を過ぎ下田原へ行く、(此所海浜の前に中州あり、向こうに小さき嶋あり、土人はやまという)是より段々浜伝い波打際を通る(黒砂利あり、平石あり、黒く疊の如くあり)少し過ぎて津荷村あり。

「紀南郷導記」に曰く
　下田原浦　馬次也、人口四百七十四名、棟数九十三軒有り、此所には四季共に石決明(鮑)多し、故に海人多し、王子の小社有り、浦神より此所迄浜辺、順道なり。

「異本熊野歩行記」に曰く
下田原　那智山より五里南、元は太田荘、今は古座に属す。
宿下田原　風狂子
来往下田原
幾回宿此村
馴人樹林鳥
抱子石床猿
緑水映江満
蒼波触岸翻
快懐勝絶景
日暮入僧園

「紀伊国名所図絵」に曰く
下田原村
　出崎に辨天社有り。濱辺は波打際を通り黒き砂利有り、平岩とて疊を敷きたる如くなる岩あり。

一、古城跡

佐部の古城跡は前記の如し、然るに其の旧蹟は已に破壊せられて今其の存在を知るに由なし。佐部の陣は既に沿革誌中に述べつるが、尚又諸文書に記する所多少の相違あるを以て参考の為に左に載録す。

「熊野歩行記」に曰く
　天正の頃、高瓦と堀内と領地を争う事有りて一戦に及ぶ、高瓦は自分計りにては堀内に敵する事叶わず、故に保養、小山、安宅、山本を頼み加勢を請うい、堀内は太田荘佐部山に要害を構へ、椎橋(後長田と改む)権左右衛門武功者にて要害を堅固に守りける処、保養の鬼善五郎と云う者総人数に下知しけるは此程の小城を此人数にて落さざるは頼まれし人の愧(恥)なるぞと真先に進みければ、寄手の人数一同に山傍を伝い、要害の中へ馳せ入らんとする所を権左右衛門、上より大石を落し矢を放つ事雨の如し、寄手の足元死途路になりければ、権左右衛門時分は好きぞと二百余人